

# 源氏物語爪印 総角卷

村 井 利 彦

- 【1】「あまた耳馴れたまひにし」宇治の「川風」が、殊に「この秋はいとはしたなくもの悲し」い。八宮一周忌からの書き出しである。いままで気にもとめなかった川風が身に滲みるというのは、これまで守られていた姫君たちが、現実の風にされされるという象徴表現であろう。
- 【2】八月二十日。一周忌に薫が宇治にやってくる。阿閼梨もここにいる。役者は揃っているのである。
- 【3】「名香の糸」「結びあげたるたたり」(11)など、卑近でリアルな表現が目立つ。これも、この時期の特徴であろう。物語から現実へ。
- 【4】伊勢の御と貫之を並べて出すのは、桐壺巻以来のことである。こういう技巧も、この巻が源氏物語の終わりに近づいている巻なのだというサインであろうか。始めに帰って終わる。
- 【5】貫之の「ものとはなしに」の歌であるが、その詞書「東へまかりける時、道にてよめる」の「道」は宇治であったのだろうか。宇治は都が果てるところ、東国への出発地点である。
- 【6】古歌には気を晴らす作用がある。「古言ぞ、人の心をのぶるたよりなりける」(12)。桐壺巻では現代の感覚があった伊勢と貫之が、今「古言」となっていることに注目したい。あれから70年以上の歳月が経過している。
- 【7】薫の大君に与えた歌。「あげまきに長き契りをむすびこめおなじ所によりもあはなむ」(12)は、きわめて直接的表現である。この巻の基調を決定する歌ともいえるよう。二人が「よりあふ」イメージである。大君は「例の、と、うるさけれど」とあることから分かるように、薫の自分に対する気持ちを大君は承知している。
- 【8】大君と逢うと、例によって、自分のことはそこそこにして、勾宮の話題に転ずる薫。大君も中君の話を持ち出す。二人の気質は非常に似ているのではな

いか。大君は、自分の感情に素直なタイプではない。その点で、薫の性格をさらに増幅した性格かと推察される。むしろ、薫が目指した性格を実現している女性だ、と捉えておくともいえるかもしれない。朝顔の性格ばかりではなく、葵上の性格をもこの際考慮にいれておく必要を感じる。

【9】薫の言う匂宮の性格。「聞こえそめたまひけむ負けじ魂」(13)は、いかにも光源氏の血脈を感じさせる語である。空蟬のイメージを喚起させる狙いがあるか。

【10】大君の言葉にある宇治意識。「かかる住ひなどに、心あらむ人は、思ひ残すことはあるまじき」(13)。厳しい現実認識は宇治に似合う発想である。

【11】大君は、薫に対し八宮から結婚の話は、具体的に何も聞いていないと明言している。八宮は「世づきたるかたを思ひ絶ゆべくおぼしおきてける」(14)と大君は理解していることが分かる。前巻から考えて、大君の理解は正しい。そもそも、八宮は、薫が世間的な結婚を望む人物だとは認識していなかったのだから。大君も、いまそう思ったがっているのだと考えられる。

【12】中君に対しては、「深山隠れには心苦しく見」える人であるから、自分のように「朽木には」したくない。と大君は思っている。匂宮ではなく、中君を薫に、という意識は、最初からあると考えられる。この朽木だが、椎本巻の巻末の大君の瘦せた姿を不気味に暗示しよう。

【13】弁を呼び、話が違うではないか。どういうことだ、お前は知っているのではないかと薫が言う。「ただ後の世ざまの心ばへにて進み参りそめし」自分の心を、このように変えたのは八宮の遺言である。と、薫は弁に語る(14)。彼は政治的に振る舞っていないか。八宮が死んでいることをいいことにして、八宮の遺言を都合よく解釈して、弁に信じ込ませる。これは、じわじわと大君と中君の外堀を埋めてゆく戦略だろう。一条御息所の遺言を利用した、かつての夕霧のようなやり方である。読者の共感を得られるだろうか。結果的に、落葉宮は幸せになっているけれども。

【14】「いとあやしき本性にて、世の中に心をしむるかたなかりつるを、さるべきにてや、かうまでも聞こえ馴れにけむ」(15)。弁に向かっての薫の言葉は、正直である。「さるべきにてや」に、源氏物語の罪がこめられている。薫の物語は、罪の精算という側面もある。

【15】「世人もやうやう言ひなすやうあべかんめる」(15)。ここで竹河巻巻末の時点に達するというべきか。この巻の冒頭、薫は「中納言殿」と呼ばれている。竹河巻巻末は源氏物語の現在であり、それはそのまま紫式部の現代を意味する可能性が強い。

【16】考えてみれば、大君が薫と結婚し、中君が匂宮と結婚する。ということは、最高の処置というべきであり、決して不満はないはずだ、という薫の心理(15)

はもっともな話である。がしかし、このもっともな話、世間の常識が通用しない世界が、宇治十帖の世界ということであろう。「われも人も世の常に心とけて聞こえ通はばや」(15)と薫は希求した。薫は「世の常」の人にあえてならう、あるいはなりたく思っている。しかし、大君は「世の常」の幸福を望んではいない。「世の常ならざる世界」で身を全うしようとしている。この乖離が宇治十帖なのだ。

【17】弁はこの時、通常の女房のように、薫に追従した返事をしない。薫と大君の結婚を祝福する気持ちは気持ちとして、冷静に大君の弁護をする。この弁という人物もまた相当の人物であるという印象を読者に与えることになる。弁は大君の処世を「もとより、かく人に違ひたまへる御癖どもにはべればにや、いかにもいかに、世の常に何やかやなど、思ひよりたまへる御けしきになむはべらぬ」(15～6)と述べる。大君の思念は、なまはんかに出来上がった思念ではない、と弁は言っているのである。「世の常」の発想など物の数ではない。薫はここで、八宮一族の苦難の日々を考える時なのである。彼にその用意ありやなしや。

【18】八宮亡き後、大君中君のまわりは、蓬生巻の末摘花周辺の状況に似てきている。それを、安易に批判すべきではないと弁は言っている(16)。人には生活というものがあり、霞を食い理想に生きるわけにはいかないからだという弁の言葉は、宇治十帖の現実の厳しさをよく示している。救うもののいない、救われない現実。「世の常の人」薫ははたして、ただならぬ宇治を理解し、宇治を救えるのか。

【19】「松の葉をすきて勤むる山伏」(16)、松葉を食ったという伝説のある喜撰法師の食生活がしのばれる記述。宇治にある皮肉な伝説という文脈であろう。

【20】大君の思い。薫と中君を結婚させる。自分に結婚の意思はない。弁をとおして、ここに初めて大君の胸の内が披露される。この巻は、この大君の思いが並大抵のものではないことを描く巻である。

【21】中君と匂宮との文のやりとりは、社交のレベルである。という大君の認識が示されている(17)。

【22】薫が大君にひかれるのは、世間一般の色恋とは異質であるという説明がある。

「世の常のなよびかなる筋にもあらずや」(17)。本当にそうか。彼の言葉は弁の言葉に触発されただけではないのか。ままよ、薫の説明を聞こう。大君と兄弟のような関係を結び、「定めなき世の物語を、隔てなく聞こえ」る関係でありたい。となれば、彼は中君に八宮を期待しているのである。当時、こういう評価を得るにたる女性は稀であったはず。その意味からすれば、大君の物語は、大人の女性の物語である。男子と同等、もしくはそれ以上の資質を持つ女の物語である可能性をはらんでいるのだという点をおさえておく必要がある。い

うなれば、ここは「無言太子でない紫上」の存在が期待されているのである。雨夜品定めにあった学者の娘・鬼女の物語が、ここにおいては笑劇でなくなっていることも重要なポイントであろう。現在、薫は「世の中の思ふことの、あはれにも、をかしくも、愁はしくも、時につけたるありさまを、心に籠めてのみ過ぐる身」(18)である。親しい兄弟もなく、「後の宮」「三条の宮」「そのほかの女」、いずれも彼の魂を休息させてくれるものはいない。秘密を共有する唯一の人・老いたる弁に語った、淋しい薫の心境吐露を通じて、大君の存在は重みを急激に増してくる。ここで、問題が発生する。大君は果たして、彼の思いを充たす存在か、という問題である。これは致命的問題ではないのか。薫は、かつて八宮が薫にそうしたように、大君に過度の期待を抱いているのではないかという疑念である。

【23】 弁には二人の仲をとりもちたいという気持ちがある。しかし、二人の高貴さゆえに、なかなかきさくに振る舞えない。このところで、読者は、弁の気持ちを共有するかもしれない。となると、大君と薫の恋は、誇り高い男と女が、理想に殉じて、世俗的な結婚に墜落しない物語という相貌を呈することになる。そういう読みも、もちろん可能である。

【24】 その夜泊まった薫と大君との仏間での対座。八宮を介した場面。八宮よ、御照覧あれ、といったところか。「仏の御前にて誓言も立てはべらむ」(21)という効果は無視できない。この場面、ひどく映像的である。「仏のおはする中の戸を開けて、御燈明の火けざやかにかけさせて、簾に屏風を添へてぞおはする。外にも大殿油参らすれど」(19)。大君は母屋にいて、薫は庇の間にいる。

【25】 「うち捨てて入らせたまひなば、いと心細からむ」(21)と言って中に入る薫。淋しい薫の面目躍如であろう。⇒【22】。

【26】 大君を捕まえ、髪「かきやりつつ」も、「御心破らじ」(21)「かくはあらで、おのづから心ゆるびしたまふをりもありなむ」(22)と思い止まる薫は、彼の言うとおりに「世に違へる痴者」(21)である。夕霧巻の、小野の夕霧が思い出されよう。やはり、弁への弁明がその場限りのものであったとみえる。⇒【22】。しかし、こうすることによって、薫にとって大君が、彼が通常相手にする、世の常の女とは違う特別の人であるということは充分に表現されたというべきであろう。この段階ではこれで充分であったということか。

【27】 しかし、ここにおける大君は、美しい人として立ち上がる。前巻最後の、鬼女橋姫の風貌を遠く宿した瘦せた女のイメージはない。

【28】 「われならで尋ね来る人もあらましかば、さてや止みなまし、いかにくちをしきわざならまし」(22)という薫の思いは、匂宮が登場し、嵐のように振る舞う浮舟巻への強烈な予告であろう。

【29】 慎重過ぎる薫の行動は、破滅的に行動した自分の父に似まいとする心理規

制が働いたというべきか。「汝が爺に似ることなかれ」という、昔の光源氏の呪文が効いているとみることもできる。⇒柏木巻【63】。

【30】馴れ初めから、現在に至るまでの思いを告白する薫(23)。告白が性急すぎる。しかも正直すぎる告白は、薫を八宮のように誤解している大君に、二重人格と思われるだけである。このことを薫は気付かない。焦っているからである。大君は思う。「うとましく、かかる心ばへながらつれなくまめだちたまひけるかな」。薫は、ただいまの自分の行動および言動でもって、大君の期待を粉碎してしまったのである。この薫の行為を、広い心で許すほど、大君は世慣れていない。薫は、ここで大君の処女性を、一段と肥大化してしまった、といえようか。

【31】この夜のことは、大君にとっては、男への失望、八宮の遺言の正さを確認する結果となる。「げにながらへば、心のほかにかくあるまじきことも見るべきわざにこそは」(24)。彼女の早い死は、ここに始まると考えられよう。

【32】宇治川の効果音がうまく使われている。大君の今の気持ち。「水の音に流れ添うこちしたまふ」(24)。

【33】「光見えつるかたの障子をおしあげたまひて、空のあはれなるをもらともに見たまふ」(24)とある。八宮邸のモデルと思われる宇治神社のあたりは、東側に山が迫っていて、夜明けの空を見るには適当なロケーションではない。紫式部は、宇治の土地カンに乏しい。また、この記述から、八宮邸は、格子がなかったように見える。山荘だから、面倒な格子は省略した作りになっていたのだろうか。

【34】一緒に朝を迎え、「何とはなくて、ただかやうに月をも花をも同じ心にもてあそび、はかなき世のありさまを聞こえ合はせてなむ過ぐさまほしき」(24~5)という薫の言葉を聞くころ、ようやく、利発な大君は、薫の特殊性を了解したのではないかと思われる。

【35】「むら鳥の立ちさまよふ羽風近く聞ゆ」(25)。まさかと思うが、リアルな表現である。山荘の小ささ故だろうか。

【36】薫の行為は、彼の言葉通り「世に違ひたること」(25)なのであって、光源氏の「世の常ならざる」世界とは異質のものである。夕霧巻の夕霧の行為に準じて理解すべきものと考えたい。

【37】薫の行為はしかし、既定事実づくりの効果があつた。「ことあり顔に朝露もえ分けはべるまじ、また、人はいかがおしはかりきこゆべき」(25)。事を推察して遠ざかった女房の品のよさが、既定事実づくりに役かうことになるだろう。大君は、こうして追い詰められる。読者には夕霧巻の落葉宮、小野の場面が思い出されることだろう。

【38】大君の歌「鳥の音も聞こえぬ山と思ひしを世の憂きことはたづね来にけり」(26)は、神仙境であるはずの宇治の地が、現実には侵されているという現在をよ

く表示している。薫はけっして神仙の人なのではない。世の常の人で「世の憂きこと」をもたらす人なのである。

【39】薫が大君を「障子口まで送」った場面。帯木巻の光源氏と空蟬の別れの場面を彷彿させる。

【40】大君は、自分と薫との結婚を望んだ八宮の胸の内を承知していることが確認できる(27)。従って、結婚を拒むのは、八宮の意思ではなく、あくまで大君本人の意思であるということになる。八宮は薫に「さやうなる心ばへあらば」(27)という前提条件で語っているのであって、八宮が薫に「さやうなる心ばへ」があるとは思っていないことは、これまでみてきたとおりである。

【41】大君の結婚拒否の論理。薫には、自分より「さま容貌も盛りにあたらしげなる中の君」(27)の方がふさわしい。自分には後見人がいない。自分は二人の後見人になれる。薫が普通の男であったなら、結婚もこれまでのいきがかりから考えぬでもない。が、あいにく薫は「はづかしげに見えにくきけしき」の人である。後段は、彼女の愛の表現であるとともに、冷厳な自己認識である。椎本巻の終わり、垣間見の段が、ここで生かされていることが分かる。⇒【27】。「身のほど」を知る空蟬、そして明石上の人生が、大君の上にかぶさってくる。「わが世はかくて過ぐし果ててむ」(27)。彼女は八宮の期待どおりの人となっている。

【42】大君もまた、父・八宮がそうしたように薫を買いかぶっている。二人は、それぞれの幻想に敬意を表しすぎているのではないか。しかし、買いかぶりは恋することと同意義であるから、二人は、ここで恋に落ちたと読む文脈であろう。

【43】帰ってきた大君が、薫の匂いに染まっていたことで、中君は、宿直人の一件に照らして、大君と薫の昨夜の結婚を確信する。となると、大君の戦略の成功はおぼつかない結果となることが予想される。

【44】大君も、催馬楽「総角」の歌詞を意識しつつ、中君の認識を予測している(28)。この「総角」は、この巻の基調音として絶妙というべきであろう。「総角や、とうとう、尋ばかりや、とうとう、離りて寝たれども、轉びあひけり、とうとう、か寄りあひけり、とうとう」。少年と少女の恋。薫と大君を少年少女というには無理があるけれども。総角以外の部分を響かす技巧である。「若紫」の技巧に同じと了解すればよい。

【45】源氏物語の催馬楽受容についていえば。そもそも催馬楽のもつ諷諭詩的側面と響き合っているのではないか。民間の実情を帝王が理解する文脈である。ここは、宇治の田舎ぶりの表示であろうか。

【46】その朝の、組糸。スリリングな描写である。

【47】薫からの後朝めいた文が来る。返事をしない大君。これを女房が「さも見苦しく、若々しくおはす」(29)と評す。薫と大君は「総角の恋」なのだという

位置づけであろう。そう解釈すべきなのではないか。

- 【48】「御服など果てて」(29)とある。ここまで、一周忌中の出来事ということになる。なお、八宮の命日は八月二十日。薫が行為に及ばなかったのは、その点への配慮もあった。これは結果論か。これから、いよいよ恋が始まる、始まってよいという雰囲気が醸成されることは事実である。
- 【49】「近劣り」(29)。近まさりの反対語。「近まさり」は中君のキーワード。中君の美しさは「世のもののおもひ忘るるこちしてめでた」(29)し、とある。このあたり、喪があけて、着替えた中君の美しさが匂い立つ風情である。中君と薫との結婚に大君は自信をもっている。中君が紫上の後継者であることはすでに触れた。
- 【50】「長月」(29)とあるが、現在は八月下旬でなければ、後段の「二十六日、彼岸の果てにて」(47)と矛盾する。ここは、下に「も待ちかねて」とおぎなうて理解するほかない。彼岸の初めごろ、薫は宇治へ行ったのである。半年も空けることのあった前巻の宇治通いとは雲泥の差である。大君は、薫にとって中君同様「近まさり」の女であったのである。
- 【51】弁をはじめ周りの女房たちは皆、薫の味方であるという状況。朝顔斎院の場合に同じ。「ただ入れたてまつらむ」(30)と積極的なのが、田舎風である。周囲の者は、薫と大君に引かれて「世の常」の世界に帰りたいのである。大君の立場の困難性は、朝顔を越えている。
- 【52】大君は「昔物語」の例を考えている。姫君の意思ではなく周囲の女房たちの意思で、「とあることもかかることもあめる」(30)。用心せねばならない。この大君の思念は、源氏物語のこれからの展開の予告となっている。姫君の意思が貫かれる物語を語ろうという作者のメッセージである。
- 【53】大君はすでに自分も中君も、薫に見られていることをしらない。したがって、中君を見たら、いくら薫だって気に入るはずだと考えるのである。こここのところの大君の思念は、とても現実的世俗的である。
- 【54】「君だに世の常にもてなしたまひて、かかる身のありさまもおもたしく、なぐさむばかり見たてまつりなさばや」(32)と中君に薫との結婚を勧めようとして、大君が途中で止めたのはなぜであろうか。妹に犠牲を強いるうしろめたさか、あるいは心の底の未練か。父君の遺言は、大君一人のためにあったのではないという中君の正論にたちろぎ、遺言を破ろうとしている自分を恥じたのか。
- 【55】「世の常」の世界。これが常に対局に存在する。宇治十帖理解のキーワードであろう。その「世の常」の世界は、光源氏の子孫のいる世界だが、決して光源氏のいる世界ではない。「世の常」でない世界にいないかぎり、光源氏の世界、つまり源氏物語の世界には存在できないのだ。という認識を、われわれ読者も

もつべき時である。

【56】弁の説得に、大君は思う。「一所おはせましかば」。両親の一人でもいてくれたら「宿世といふなるかたにつけて」(33)、世の通例に身をまかせることも出来るのに。宿世という発想を利用しない物語。宿世で誤魔化さない物語。姫君の意思をとことん貫く物語を作者は書こうとしていることに注目したい。⇒【52】。

【57】「例の色の御衣どもたてまつりかへよ」(33)と大君に女房たちはすすめている。大君は、一周忌以後も喪服めいた服装でいたと見える。彼女の意思表示である。

【58】薫の持久作戦。「御心ゆるしたまはずは、いつもいつもかくて過ぎさむ」(34)。こう思っていれば、強かろう。既定事実を積み上げ、状況でもって結婚を迫っていくやり方は、夕霧ゆずりのものだ。⇒夕霧巻。このあたり、薫の政治的実力が仄かに見てとれないか。

【59】大君が弁に自分の心中を語り、「この君の盛り過ぎたまはむくちをし」(34)と中君をすすめる時、椎本巻の年齢設定が生きる。現在大君二十六歳、中君二十四歳。中君は女の盛りをまさに過ぎようとしている。大君は、明らかに過ぎてしまっている。⇒椎本巻【25】

【60】両親がそろっていても、なかなかこういう結婚は望めないという弁の言葉は説得力がある。大君に薫。中君に勾宮。⇒【16】。弁は、この時、悲惨な八宮家の歴史に思いを馳せていたにちがいない。読者には、この時、娘の結婚に失敗した玉鬘のことを思い出すかもしれない。⇒竹河巻。「後の御心は知りたけれど」(35)。結婚はいつの時代も賭なのだと、弁は言いたいのではないか。彼女は、「めでたき御宿世」を確信しているらしいが。

【61】弁は言う。八宮の遺言は、「さるべき人のおはせず、品ほどならぬことやおはしまさむ」と考えて、その条件内での言葉であろうと。弁のように考えると、八宮の遺言の矛盾は解消する。八宮は、薫にその気があれば、諸手を挙げて賛成したはずだ。時折、弁にもそう言っていたらしい。ただ八宮は、薫を誤解して死んだのみ。その点については、幾度も触れたので繰り返さない。

【62】「ほどほどにつけて、思ふ人に後れたまひぬる人は、高きも下れるも、心のほかにあるまじきさまにさすらふたぐひだにこそ多くはべめれ」(36)。当時の現実。須磨・明石の光源氏。桐壺以前の明石一族、そして常陸宮家の娘・末摘花が陥りそうになった現実のことを考えておけばよい。

【63】理想を絵にかいたような人物である薫を拒む大君の気が知れない。と弁は言う。たとえ出家しても「雲霞をやは」と言う弁の弁舌には迫力がある。弁はここを先途と熱弁をふるったのである。薄雲巻における明石尼君のように。「いと憎く心づきなし」と大君は思ったが、この迫力、この説得力には「ひれ臥す」



ほかはなかったとみえる。

【64】「まだけはひ暑きほどなれば」(37)とある。頃は彼岸以前であったのだから、こういう日もあったということだろう。

【65】大君の処世観は、いうなれば薫と一緒にいる。このことは薫も認識している。「いとどわが心通ひておぼゆれば、さかしだち憎くもおぼえず」(37)ということになる。彼が、彼女をかけがえのない人だと思ふ理由である。これは、若紫巻における、光源氏と紫上との関係を想起させる設定であることに注意したい。

【66】大君と中君とが寝ている部屋に、薫が弁に導かれて入ってゆく場面。大君がそっと抜け出す場面。かつての空蟬の場面と同じ。違うのは、そのまま進んだ光源氏と、踏み止まった薫の行為である。光源氏は、空蟬の恥を思つて、軒端萩と契つた。嘘をついて憎い空蟬を光源氏は救つたのであつた。一方、薫はあくまで正直である。危機管理の発想からすれば、これでよい。が、正直な行為には奥行きがなく、身も蓋もない現実を露呈せしめるのみだ。繕ってくれる人がいなければ、收拾のつかぬ世界となろう。

【67】薫が、自分だと思つて、「いと馴れ顔に」中君の許に入つてゆくのを、大君は屏風の後ろから見ている。これは壮絶な場面だが、考えてみれば、身も蓋もない世界ではないか。

【68】薫は、椎本巻の最後で、大君と中君とを垣間見している。中君の圧倒的美しさを了解している。今、実物に接し「今すこしうつくしくうたげなるけしきはまさりてや」(39)と中君の魅力を確認している。その上で、踏み止まった。同じく、空蟬と軒端萩を垣間見て、軒端萩の魅力にひかれ、そのまま進んだ光源氏との比較が鮮やかである。

【69】老女房の描写(40)。こういう環境だから、大君のような特殊な性格が生まれるということか。朝顔の環境と似ている。もっと酷いが末摘花とて同じことだ。

【70】老女が大君の態度を評して「恐ろしき神ぞ憑かせたまはむ」と言い、他の老女が「あなまがまがし。なぞのものか憑かせたまはむ」と反駁する。ここで、大君が物怪につきうごかされているのだという発想が記されていることに留意しておくべきである。手習巻において、浮舟から遊離した宇治の物怪が、大君を取り殺したのだという事実を告白するからだ。

【71】老女のいびき(40)。大君は、朝顔がそうだったように、こうなる自分の、確実に近づいてくる未来を憎んでいたにちがいない。

【72】部屋の隅に身を隠し、朝になって出てきた大君を「壁のなかの蟋蟀」(41)と表現している。言いえて妙である。

【73】「今宵なむ、まことにはづかしく、身も投げつべきこちする」(42)という薫。大君は私より、身分の高い匂宮の方がいいのでしょうか。と弁にすねる薫が可愛い。このあたりは余裕か。弁たちには脅迫的言辭だとうけとられているけ

れども。

- 【74】薫からの後朝の文を喜ぶ大君(43)。彼女の薫への愛が滲み出ている。妹の方がもう大分よくなったのではありませんか、と返事した大君も、すねて甘えた語気で、薫への思いをこめている。これでは、犬も食わぬ。薫の機嫌が直るのも当然である。薫もまた、このやりとりで、大君の心の底を了解したというべきだろう。
- 【75】薫は、昨夜の一件は、大君の策略なのだと了解している(44)。彼も、大君が中君をと勧めた気持ち、なおざりのものではないことをこの一件で知らしめられた。ならば、自分の大君を思う気持ちが並大抵のものではないことを大君に知ってもらおうと構える、という展開は自然であろう。薫は、自分の気持ちが、正確に大君に届かぬもどかしさに、この時少々焦っているのである。焦ると必ず事をしそんじる。
- 【76】「同じあたり」を「かへすがへす漕ぎめぐ」る男のことを「棚なし小舟」と言う。これは「人笑へ」な行為である(44)。これも面白い。
- 【77】三条宮焼失の後、薫は六条院に転居している。母の女三宮と一緒に生活しているらしい。匂宮とはだから、「近くては常に参りたまふ」(44)という状態にある。⇒椎本巻【81】。匂宮は、今二条院ではなく、六条院にいらしいことが分かる。
- 【78】薫が、匂宮のもとを訪れ語る場面は絵画的である。本文にも「絵に描きたるやうなる」(45)とある。月是有明。霧たつ「明けぐれ」の時刻。階の途中に腰を下ろしている薫。高欄によりかかっている直衣姿の匂宮。ここで、薫は匂宮に中君を、と決断したと読める。
- 【79】昨夜の一件は、また別の要素を生じている。中君の「心ばせの近劣りするやうもや」(46)という薫の懸念が晴れたことである。彼は、もったいをつけながらも、匂宮に自信をもって中君を薦めることができる立場にたてたということである。
- 【80】八月二十六日は「彼岸の果て」の「よき日」であった。ということは、彼岸は八月二十日から始まっていることになる。八宮の命日は八月二十日。彼は、彼岸に死んでいるのである。往生に成功した確率が高いと、この段階では考えられよう。また「よき日」を選んでいところに、中君の幸福を願う薫の意思がにじんでいる。これは、薫の個人的意思というより、源氏物語の意思を感じないか。八宮の救済である。
- 【81】さて、その二十六日。薫は匂宮をつれて宇治に行く。「後の宮など聞こしめし出でては、かかる御ありきいみじく制しきこえたまふ」(47)ところに匂宮の現在がある。彼は次の皇太子候補。匂宮と中君の結婚は、未来のある結婚なのである。源氏物語の意思、であろう。

【82】 薫の計略は、老いた弁たちの企ての疎略さとは違い、用意周到、冷静に計算され、果断に実行されて余すところがないものであった。川向こうの施設は利用せず、八宮邸近くの「御庄の人の家」を利用する。薫の到来と触れまわる。匂宮はそこから馬で夜陰にまぎれてやってくる。大君でも中君でもいい、薫が結婚してくれればと思う弁の心は利用され、薫が中君に心に移したと信じたい大君の心は読み尽くされる。挨拶にやってきたはずの薫とは、鍵をしっかりとかけた障子越しに対話する。中君の部屋へと通じる障子は鍵をかけない。薫を入れるためである。匂宮は扇を鳴らす。薫だと信じた弁の導きで匂宮は難なく侵入する。かくして中君と匂宮は結ばれ、大君の退路は塞がれる。鍵のかかった障子の向こうで、真相を語り運命を論じ、もはや貴方は私と結婚するほかないのです、と言って迫る薫に大君は絶望的な気持ちになる。彼女の自尊心はずたずたにされ、薫を恨む。馬鹿にするでない。これでは「昔物語などに、ことさらにをこめきて作り出でたるもののたとひ」ではないか。と言いつつも、袖を離さず、障子を破らんばかりの薫の情熱を冷まそうと、努力するいじらしさも見える。恨まれた薫は、必死になって弁明する。「あが君、御心に従ふことのたぐひなければこそ、かくまでかたくなしくなりはべれ」。「さらば、隔てながらも聞こえさせむ。ひたぶるになうち捨てさせたまひそ」(52)。このあたり、迫力充分である。薫の気持ちは述べつくされ、必ずや大君に届いたものと推察される。大君は「はひ入りて、さすがに入りも果てたまはぬ」という状態である。このような、信じられぬ絶望的事件を共有することによって二人は一つになれたというべきか。中君には迷惑な話かも知れないけれども。

【83】 大君と薫の朝。「いとどしき水の音に目もさめて、夜半のあらしに、山鳥のこちして明かしかねたまふ」(52~3)。優れた描写である。

【84】 「心もゆかぬ明けぐれ」(53)。この「明けぐれ」という語だが、45ページにも見える。薫が初めて姉妹を見た場面のことを、椎本巻で「ほの見しあけぐれ」と表現していた。紫上の死を「明けぐれの夢」と表現していた。⇒御法【42】。作者の好きな言葉なのだと思う。男と女が逢って別れる時刻。『枕草子』でいえば曙である。

【85】 宇治を出発したのは朝まだき「暗さほど」。六条院に到着したのが「まだ人騒がしからぬ朝のほど」(54)。かなりの速度である。宇治京都間、急げば小一時間で可能である。⇒椎本巻【56】。「帰るさはいとはるけくおぼされて」という心理は、普通逆ではないか。ここは、すでに通い始めている心理で言っているのだが。まだ宇治を軽く扱っている心理の尻尾が見えるような気がする。薫と匂宮二人の笑いも、読者にとって気味のいいものではないはずだ。匂宮の後朝歌も、同断である。これは「世のつね」の世界ではないか。

【86】 後朝の「御使」は「例たてまつれたまふ上童」。日常に埋没させたい匂宮の

心理。「紫苑色の細長一襲に、三重襲の袴」を祿に取らせようとする大君は、この日を特別視する立場である。使いの迷惑顔は、「ものしくなむ聞こしめしける」匂宮の心理の反映だろう。匂宮ははたして本気なのか。不安を醸成する場面である。大君の処置は、あまりに生硬で、世馴れていない。末摘花を連想するのは、失礼かもしれないが、あながち間違った想像ではない。

【87】この事件がきっかけとなって、中君の心理が語られはじめる。そうすることによって、中君が主役の座にせりあがってくる。何も知らない中君の未来は多様にひらけ、何もかも知っている大君の未来は旧態依然として、そのうち枯れてゆく。

【88】第二夜。同行しない薫。もっともな心理。大君へのあてつけもあるか。「冷泉院にかならずさぶらふべきことはべれば」(56)という口実をもうけている。薫は、依然として冷泉院にいるのである。

【89】大君の言葉。「世の中に久しくもおぼえはべらねば」(56)。近づく死への最初の立言である。

【90】大君は、第二夜から現実に対応し、中君の後見として活動している。「これやげに、人の言ふめるのがれがたき御契りなりけむ」(57)。と現実を合理化している。

【91】中君は、大君よりむしろ「らうらうじくかどあるかたのにほひはまさりたまへる」(58)という設定。彼女の方が主役なのである。

【92】「ひつぎ書き」(59)。女房散らし書きと違って、現在のように、上下をきちんと揃えて書く手紙の書き方をこういったらしい。

【93】明石中宮の匂宮への忠告(60~1)。匂宮の「好いたまへる御名のやうやう聞こゆる」ことへの心配。天皇もこのことは承知している。光源氏の、紅葉賀あたりの状況である。中宮の諫めの語気から、匂宮の将来をうかがうことができる。東宮、そして即位の道が仄見える。

【94】中宮のいさめは、匂宮に強い影響を及ぼす。肝心の三日餅を食う第三夜、宇治へ行けぬという手紙を一旦出したほどである。これは、宇治のことは「好いたまへる」遊びの内であったという冷静な視点の導入とみるべきだろう。

【95】それでも、宇治に匂宮が行ったのは、薫のとりなしである。後はまかせろと、匂宮のかわりに中宮のところにいてあげる。友情というべきか。彼には、是非にも、匂宮と中君との結婚を「好いたまへる」遊び・好き事のレベルから脱出させねば、面目が立たぬのである。

【96】匂宮が馬に乗って行ったというのも、彼の熱情があらわれていて面白い。普通、木幡のあたりは、歩いてゆくというのが、風流人のやり方だから。「山科の木幡の里に馬はあれどちよりぞ来る君を思へば」(『拾遺集』巻十九)。

【97】明石中宮が「大宮」と薫と呼ばれている。光源氏時代からの年月を想像さ

せる呼称である。現在、明石中宮は、すでに43歳。紫上の人生を終えている年齢である。

【98】「いよいよ若くをかしきけはひなむまさりたまひける」中宮を見て、「女一の宮も、かくておはしますべかめる、いかならむをりに、かばかりにてももの近く、御声をだに聞きたてまつらむ」(62-3)と思う薫。竹河巻で、若々しい玉鬘を見て、竹河の大君や宇治の大君を思ったと同じ心理である。さて、この条は注意が肝心である。彼の本命が、大君ではないということを示す記述であるからだ。大君より女一宮。宇治は、かくて絶対性を剝奪され、大京都という版図の中で悲しくも相対化されてしまう。巨大な権力の構図の中で、宇治人は、いかにもか弱い。川もろとも流されてしまう気配である。物語の存立を許さぬ、現実の強い力をギリギリとみせつける箇所であろう。

【99】「好いたる人の、思ふまじき心つかふらむも、かやうなる御仲らひの、さすがに氣遠からず入り立ちて、心にかなはぬをりのことならむかし」(63)は、その昔の、光源氏と藤壺。光源氏と六条御息所などといった恋の成り立ちを思い起こさせる条文である。「わが心のやうに、ひがひがしき心のたぐひやはまた世にあんべかめる」と薫は言う。薫の性格と行為は、乱れた源氏物語を閉じる役割を担わされた人格設定ではないのかと思われる。

【0100】宮中においては、薫は「さらにさらに乱れそめじの心にて、いときすくにもてなし」(63)ていた。乱れを見せたのは宇治だけだ、という構図。旅の場所で、彼はくつろぎ、油断したのかもしれない。後宮の場面は、前巻で、八宮が宮中生活を回想し、自己を語った場面と照応するものと考えられる。⇒椎本巻【35】。

【0101】それにしても「立ちてもゐても、ただ常なきありさまを思ひありきたまふ」(63)という薫の描写は面白い。これでは、宮中で薫の実態が知られることもあるまいし、明石中宮の信頼が揺るぐこともなさそうである。

【0102】一旦、行けないという文が来て、夜中に本人が来る。宇治の感激は推して知るべしである。中君も、匂宮に心を許し、匂宮も、「いみじくをかしげに盛りと見え」(64)る中君が気に入る。「多く近まざりしたりとおぼさるる」とある。これで、この二人の問題は峠を越えたと知れよう。

【0103】老いた女房たちを見て、自分の老いを思う大君。朝顔巻ですでに馴染みの発想である。「われもやうやう盛り過ぎぬる身ぞかし、鏡を見れば、痩せ痩せになりもてゆく」(65)という認識が「はづかしげならむ人に見えむことは、いよいよかたはらいたく」彼女に思わせるのである。ということは、薫と結婚せぬことが、彼女の薫への愛なのだということになる。ますますもって朝顔齋院の再来である。しかし、「痩せ痩せ」というところ、彼女の近づく死を暗示しているとみるべきだろう。大君はすでに病魔におかされているのかもしれない。

- 【0104】三日目の朝、宇治の描写。行きかう「柴積む船のかすかに行き交ふあとの白波」。紫式部は、宇治橋のあたりを水の淀んだ地域と誤解している。「いとは荒ましき岸のわたり」で後の白波は立ちようがないのである。「宇治橋のいもの古りて見えわたさるる」(67)とある。紫式部の頃、宇治橋は流失していなかったものと理解される。
- 【0105】薫と違って匂宮は、親しみやすい性格の男であったと知れる。中君も、三日で、好意を持っている。女房の批評、「中納言殿は、なつかしくはづかしげなるさまぞ添ひたまへりける。思ひなしの今ひと際にや、この御さまはいとことに」(68)。薫は尊敬に値するタイプであったが、匂宮は、なによりも魅力的な男であったのだ。
- 【0106】次の来訪が九月十日あまり。ということは、二週間ぐらいのとだえである。
- 【0107】匂宮の来訪に宇治はわきたっている。老女房たちは京の娘たちや姪たちを呼び、出仕させている。京の娘や姪たちは、見込みのない宮仕えをする母や叔母を「年ごろあなづきこえ」(70)ていたものと知れる。彼女たちが「思ひおどろく」のは当然である。かくして、中君の周りに、忠誠度が低く軽薄な侍女が集まったのではないかと心配である。
- 【0108】大君は、匂宮の行動とくらべて、「心ばへののどこにもの深くものしたまふ」(71)薫を、「ありがたし」と思う。薫は匂宮によって引き立てられている。彼にとっては不本意であろうけれども。
- 【0109】大君の心。「なほひたぶるに、いかでかくうちとけじ。あはれと思ふ人の御心も、かならずつらしと思ひぬべきわざにこそあめれ、われも人も見おとさず、心違はでやみにしがな」(71~2)。彼女にとっては、中君の現在が反面教師となつて、自身の処世への自信を強める作用をしている。結婚すると「かならずつらしと思ひぬべきわざ」が起こる。その当たり前の出来事を彼女は許せない。大君は無謀な完全主義者なのである。逢わずに愛する。完全な愛への渴望。がしかし、彼女は中君の現在を誤解しているのではないか。
- 【0110】大君は、自分の考えを冗談めかして薫に伝えている。「常よりもわが面影に恥づころなれば、うとましと見たまひてむも、さすがに苦しき」(72)。⇒【98】。「夢にだに見ゆとは見えじ朝な朝なわが面影に恥づる身なれば」という伊勢の歌を引用したのは、巻頭の流れに沿うものであろう。⇒【4】。「わが面影」とは、全盛時代の面影のことである。大君もなんだかんだと言いながら、こういうことが言えるようになり、少しずつ薫に心をひらいてきている。この夜も「遠山鳥」(73)ではあったけれども。匂宮なら、飛び込んで離さないだろうに、と想像される箇所である。
- 【0111】匂宮は、中君を京都に引き取るつもりでいる。さしあたって六条院は、六の君の婿にと志す夕霧が丑寅町にいる。夕霧は匂宮の浮ついた行為に目をひ

からせ中宮にも注意を呼びかけている。だから、六条院にひきとることはできぬ。となれば、二条院。本文には書かれていないが、読者にそう思わせるような書き振りである。彼女が二条院に入ることになれば、紫上の系譜のなかに中君は入ることになる。紫上の後継者。これは『源氏物語』として最高の処置であろう。

【0112】 匂宮の胸のうちには、中君を侍女のごとき軽い扱いには絶対しないという決意があり、帝や中宮の言うとおりに、自分が東宮になるなら、正妃とするつもりのものである(74)。この地点で中君は、完全に玉の輿路線に乗っている。彼女は決して、大君が考えているように不幸な女ではないのである。⇒【0109】。

【0113】 薫も、去年焼失した三条宮を現在再建中で、完成の暁には、「さるべきさまにて」(74)大君を迎えようという意思がある。不幸であった宇治の姫君にも、間もなく春が来そうな雲行きである。

【0114】 二人の苦労を見るにつけ、薫は二人のことを中宮に言い、事を公にする決意を固めている。いよいよ、中君幸せ物語の開始である。更衣の世話。「御帳の帷、壁代」、こんなことまで誰が気がつく。薫はロマンチストではない。絶対にリアリストなのだ。その薫が、大君の前では、ロマンチストたろうとしているのだ。

【0115】 十月一日。宇治の紅葉狩。二十日程のとだえである。いずれも薫の助言による行動である。薫は完全に親代わりの立場にある。こうして、徐々に世間に知らしめ認知させようというのが薫の戦略である。⇒【0114】。

【0116】 この紅葉狩に、上達部としては薫以外には夕霧の息子・宰相中將が参加している。竹河巻の蔵人少将である。竹河巻の終わり方で彼は宰相中將になっている。⇒【15】。⇒竹河【85】

【0117】 匂宮一行の宿は、中君の館の対岸、今の平等院のあたり。椎本巻冒頭の、花見の条と対になる構成であろう。薫の、大君たちへ指示する言葉(75)にも、花見への言及がある。

【0118】 「船にてのぼりくだり、おもしろく遊びたまふ」(76)とある。現在の宇治川では考えられない描写である。当時は、巨椋池があり、ユニチカのあたりから池は始まっていたのだ。平等院前の土手もなく、宇治川と平等院の池のあたりとは連動していたと想像されるから、今よりは川幅もだらしなく広がっていたと考えたほうがよい。となると、雨の少ない頃はともかく、宇治川の水量の多い時は、巨椋池の水位も上がり、宇治神社前は、海のような状態になったと想像しておいたほうがよいかもしれない。紫式部に土地勘がないというのは、やや暴言であった。訂正したい。⇒【33】【0104】。

【0119】 紅葉狩にかこつけて中君と逢おうという匂宮と薫の策略をうち砕いたのは、明石中宮である。彼女は、先ず宰相中將の兄・衛門の督を、つづいて宮の大夫と大勢の殿上人を差し向け、このプライベートな旅を晴れのものとして

しまったのである。先の忠告から推察されるように、匂宮の宇治通いの実相を、彼女はあらまし掴んでいるらしい。⇒【93】。中君に対する彼女の意思はノーということである。夕霧一族の意思も、その背景にあるとみるのが妥当であろう。後に衛門の督は、匂宮の宇治通いの真相を中宮に報告している(84)。

【0120】 散々気をもたせておいて、結局訪れることが出来ず帰る仕儀となった事に対する宇治の落胆。「数ならぬありさまにては、めでたき御ありさまにまじらはむ、かひなきわざかな」(78)。この段は、かつての濤標巻において、光源氏と明石御方でそうしたように、匂宮と中君との身分的落差を描いていると考えべきであろう。これを、愛の力で乗り越える物語、これが中君物語。

【0121】 宇治を去るにあたっての宰相中将・薫・衛門督・宮大夫、そして匂宮の唱和。この場面が、八宮を浮き立たせた椎本巻の花見と対になるものだという印象を決定的にしている。⇒【0117】。

【0122】 泣く「宮の大夫」の点描(80)。彼は八宮の昔を知っている男。こういう設定が物語の余裕を示し、奥行き深みを増すのである。

【0123】 期待が裏切られた大君の所感。「男というものは、虚言をこそいとよくすなれ。思はぬ人を思ふ顔にとりなす言の葉多かるもの」(81)。匂宮はやはり八宮の言っていたとおり、好色な風流人なのだ。彼女の論理知識は、「昔物語」(81)から帰納したものである。身分の低いものとはかく、匂宮のような高貴な身の上になれば、「昔物語」とは違うのではという期待も裏切られる。この思念は、匂宮から薫へと簡単に転移してゆく可能性がある。さても、完全主義者には余裕がない。彼女は、匂宮を完全には理解していない。というより誤解している。この誤解がきっかけとなって、身体の具合が悪くなったとみえる。

【0124】 中君は、大君ほど思い詰めていないことに注意したい。「わりなき障りこそものしたまふらめ」(82)。彼女にしかわからない匂宮の愛に対する確信が、こう思わせるのである。

【0125】 大君の思念は、匂宮から薫へと予想どおりに延びてゆき、八宮の遺言に想到して止む。絶対に結婚はしない。「人笑へ」とならぬよう「われだに、さるもの思ひに沈まず、罪などいと深からぬさきに、亡くなりなむ」(83)と思い詰める。事実、そうになってしまうところが恐ろしい。⇒【0123】。

【0126】 「この世にはいささか思ひなぐさむかたなくて過ぎぬべき身どもなめり」(84)は、大君による八宮一族の総括だろうか。

【0127】 中宮および夕霧という権力の側が、将来のある匂宮の行動を厳しく規制するという構図は、和泉式部の場合の帥宮に照らして理解すればよいということであろう。どうやら匂宮は内裏に軟禁状態になってしまったらしい。また、八宮の娘ということが、光源氏時代以来の嫌悪感を、中宮と夕霧が持続していたとしても不思議ではない。紅葉狩の時の、宮の大夫の涙の意味は、そのあた



りも絡んだ涙と考える必要があろう。⇒【0122】。

【0128】夕霧の六の君と、匂宮との縁談の進行は、中君と匂宮との関係をにわかに純愛化する作用がある。中君の紫上化である。正篇において、紫上は物語の中に保護される独走状態を維持していたのだけれど、今度は対立者が存在する点に注目したい。宇治の物語は現実のレベルに完全に降りてきているのである。

【0129】事態の意外な進行に、中君を匂宮に紹介した過去を薫は後悔し、「いづれもわがものにて見たてまつらむに、とがむべき人もなしかし」(85)と思う。とがめる人などいない、というところに、零落宮家の悲しい現実がある。こんなことを思う男と、大君は結婚しなくてよいのだと、冷静な読者は思うかもしれない。そう思う読者は皆、大君の味方となる。

【0130】中宮の言葉。「御心につきておぼす人あらば、ここに参らせて、例ざまに」(86)という発想は、前の薫の発想と選ぶところはない。むしろ、そんなことは絶対しないと決断している匂宮のほうがよほど物語적であるとは思わぬか。

【0131】事態がこうなってくると、八宮の遺言の先見性は明らかというべきであろう。

【0132】匂宮が女一宮のところにゆき、当代随一の女性を見、彼女に比べられるのは、冷泉院の姫君と中君だけだと思う(86)。これは、中君の格上げ、美しさの絶対化である。彼女は「山里人」(86)だが、匂宮にふさわしい存在であることはこれによって充分強調されたというべきである。先に薫が、明石中宮を見て、女一宮の絶対性を想像したことと比べてみるとよい。匂宮の方がずっと八宮の女に敬意をはらっていることが分かるというものである。⇒【98】。

【0133】匂宮の女一宮への態度は、近親相姦の匂いがする。それだけ女一宮が美しかったのだし、謹慎中の身には、宇治の中君が恋しかったのだと考えておけばよい。

【0134】女一宮とともに匂宮が絵に関心があることをここで記しておく。これは、後の浮舟事件の小道具として有効に活用しようという魂胆だろう。

【0135】紫の上への言及がある(88)。匂宮と女一宮は、紫上の形見であったことを、いまさらめくが確認しよう。

【0136】大君の見舞いにやってきた薫であるが、彼自身、今や中君に匂宮をとりついでことを後悔している。したがって、八宮の遺言の正さを言う大君に対して、なぐさめの言葉「世の中は、とてもかくてもひとつさまにて過ぐすこと難くなむはべる」(89)は、およそ慰謝にはほど遠く、大君の判断を支援するようになってしまっている。これは、大君の病状をさらに悪化する結果しかたさないように思われる。あやにくな展開である。「うしろめたくはよにあらじ」と言いつつ、匂宮を悪者とする点で二人は一致しているが、匂宮は、この時点で、むしろ被害者といつてよからう。

- 【0137】翌日、苦しい大君が、「さらばこなたに」(91)と、薫に言ったのは不気味である。彼女は自分の死期が近いのを知って、薫との対面がこれで最後となるとも思っているようにみえる。で、自分からこう言ったのである。虫の知らせだろう。薫もそれを感じている。「ありしよりはなつかしき御けしきなるも、胸つぶれておぼゆれば」(91)とある。
- 【0138】ほどほどの恋の相手に言った、薫の供人の、不用意な都の噂が大君に伝わる。彼は、主人・薫のよさを強調するために匂宮情報を曲げている。これを聞いた大君が、中君とのことは「やむごとなき方に定まりたまはぬほどの、なほざりの御すさび」であったのだと確信する。匂宮は、薫の手前、言葉だけ深いのだと。「今は限りにこそあなれ」(92)。誤解が人を殺す例は、夕霧巻以来のことである。情報から隔離されている宇治では、小さなニュースが致命的な効果を発揮する。
- 【0139】うたた寝は「もの思ふ時のわざ」(93)。雲居雁のことが思い出される。
- 【0140】うたた寝の中君は、父の夢を見た、と大君に語る。「いとものおほしたるけしきにて、このわたりにこそほのめきたまひつれ」(94)。この夢の中の八宮の表情より判断すれば、八宮は、往生に失敗している。大君は「罪深かなる底にはよもしづみたまはじ」(93)と予測していたけれども、やはり読者や女房たちが予想していた通り、彼は正念場で、大君・中君のことを思い、極楽世界に集中することが出来ず、この世に思いを残してしまったものと知れる。八宮が往生に失敗したとなれば、大君の救われる可能性は皆無となったというべきであろう。極楽往生したものは、縁あるものを六道輪廻から救い取り、極楽世界に連れてくることのできるのである。⇒『往生要集』第二章第六。
- 【0141】白氏文集「李夫人」の、反魂香への言及(94)。それほど、八宮が恋しい。身内への回帰。孤独な大君の姿。この時、彼女は父の手の中で死ぬ人生を選択したのではないか。
- 【0142】中君を「御方」(94)と呼んでいる。この時点で、明石御方のレベルに達しているということか。
- 【0143】大君は、自分の死後、中君が匂宮と途絶え、「これより名残なきかたにもてなしきこゆる人」が出現し、さらに悲惨な運命に翻弄されるかもしれないと考えている。だから、匂宮との仲を絶えぬようにしておけば、せめてそういう運命からは逃れられる。したがって、匂宮を「つらきながらも頼む」が必要があると、中君に言っている。哀れな敗北主義が大君をとらえているといえようか。
- 【0144】匂宮に対する中君の自信。「さばかり所狭きまで契りおきたまひしを、さりとて、いとかくてはやまじ、と思ひなほす心ぞ常に添ひける」(96)。肉体的判断である。大君のあずかり知らぬ世界である。これが当事者と他人の差。愛されたものだけが知る秘密の強みである。

【0145】十月末日。ほぼ一箇月のとだえ。匂宮は、なかなか宇治に行けない(96)。中宮の勧める六の君との結婚も、彼は重い腰をあげない。「そのほかに尋ねまほしくおぼさる人あらば、参らせて、重々しくもてなしたまへ」(96~7)と中宮は言う。暗に中君のことをいっているのである。匂宮は、中宮のいう「重々し」さ以上の重々しさでもって中君を待遇しようとしている。そんなこと、「今宵今宵とおぼ」すばかりの宇治では知らないことだ。

【0146】薫も、この時期の匂宮を見限っているふしがある。「見しほどよりは軽びたる御心かな」(97)。これが、決定的な誤解であることを彼は知らない。宇治の姫君を二人とも我が物にしてもなんら不都合ではないと考える彼の心理が、この断案を魅力的にしているのである。⇒【0129】。こう考えることで、薫は大君と一つになれた。一つになりたいためにそう考えたのだと考えるべきか。

【0147】「院にも内裏にも、あさましく事しげきころ」(98)、薫は、すべてを捨てて宇治へ行く。虫の知らせに彼が反応したのである。行ってみると、すでに大君は重態。弁の説明によれば、匂宮と中君の結婚後の物思いで急激に衰弱したとのこと。嘆きが積もって死に至る。光源氏の母・桐壺更衣のことが思い起こされよう。

【0148】薫が大君の手をとって「などか御声をだに聞かせたまはぬ」と言う。大君は息の下で答える。「日ごろおとづれたまはざりければ、おぼつかなくて過ぎはべりぬべきにやと、くちをしくこそはべりつれ」(100)。大君の愛の告白であろう。もうお目にかかれないうかと思いました。大君も、葵上や藤壺のように、素直になって死んでゆくのである。

【0149】「御耳にさしあてて、ものを多く聞こえたまふ」(100)。リアルな表現である。薫はありったけの愛の言葉を大君の耳から大君の中に注ぎこんだにちがいない。

【0150】この期に及んで、大君は薫に心をひらき、「かかるべき契りこそはありけめ」(101)と観念している。そして「かの片つ片の人」匂宮の不実にひき比べて「こよなうのどかにうしろやすき御心」を知ったとある。しかし、冷静に考察すれば、今、薫は匂宮の域に達しているのだという見方もできるのではないか。中君は、そういう匂宮を知っているから余裕があるのである。大君の発想にひかれて、匂宮を考えると、宇治十帖理解をしくじるような気がする。

【0151】大君は、「宿直人」としてここにおりますという薫の申し出を無下に断らなかった。死後、強情な女だったという思い出を薫にもってもらいたくなかったからである。「心ごはく、思ひ限なからじ」(101)。

【0152】夜居につめている阿闍梨がふとうた寝をする。はっと目覚めて「陀羅尼」を読むという場面。リアルで臨場感にみちた表現だ。

【0153】阿闍梨が最近みた夢(101~2)。八宮が俗人の姿で現れて、往生できなかった

た由を語り、往生をとげさせる供養をせよと言った。という夢の話を、重態の大君の側で阿闍梨がやる。これは中君のみた夢と符合し、いよいよもって、八宮の往生失敗は既定事実となる。⇒【0140】。しかし、それにしてもまたまた、阿闍梨は、いかにも無神経ではないか。藤壺の死の時の、夜居の僧、あるいは夕霧巻における律師のことが思い出されるよう。これでもって、大君の死は、いよいよ救いようのないものとなる。落葉宮の母・御息所の死に方と同じである。愛する薫が側にいるだけましということか。

【0154】「ただしばし願ひの所を隔たれるを思ふなむ、いとくやしき」(102)と八宮は言っているが、内容からみて、地獄に落ちたものとは見えない。彼にここは浄土ではないと思わせた所は、いったい何処なのか。彼は今どこにいるのか。桐壺帝のいた世界と同じということか。後考に備えたい。

【0155】阿闍梨は薫に言う。法師に命じて念仏をさせている。さらに、考えるところがあって、「常不軽をなむつかはせはべる」と言った。なぜ「常不軽」なのか。『法華経』第二十「常不軽菩薩品」によると。常不軽は、引丘・引丘尼・在家信士・在家信女を見るごとに、ことごとく礼拝賛嘆して言ったという。「私は深くあなたたちを敬います。あえて軽んじたりはいたしません。なぜかという、あなたたちは皆、菩薩道を実行して、やがて仏になれるからです」。四種の人々は、こういう常不軽を迫害した。しかし、常不軽は礼拝賛嘆を止めなかった。常不軽は臨終の時、法華経を聞き、仏となる。彼をのしった四種の人々は、ようやく常不軽を信じ、常不軽の教化によって、もろもろの教えに執着する心が消え、仏道に住むようになった。ということだ。また、常不軽を軽蔑し貶めた罪で、四種の人々は、千劫の間、阿鼻地獄に落ちていた。ということも記してある。以上を勘案すると、阿闍梨は在家信士であった八宮の執着を絶つべく、常不軽を派遣した。と考えるべきではないかと思う。八宮が、今、阿鼻地獄にいるかどうかは保証のかぎりではないけれども。

【0156】常不軽は「重々しき道には行はぬこと」と薫は言っている。宮中行事などにはないのかもしれない。そうすると、こういう宇治のような田舎にふさわしい仏事であったのかもしれない。

【0157】八宮が往生に失敗したことを確認した大君は、往生失敗の責任は自分にあると了解する。この意識がとどめとなって、彼女は死地に赴くのである。まったく救われない世界である。末世である。

【0158】薫は、亡き八宮が現在の姫君たちのことを「天翔りてもいかに見たまふらむ」(104)と想像している。この発想でいけば、桐壺帝も、光源氏や東宮のことが心配で、往生でできなかったのではないかと推察される。

【0159】薫は、ずっと宇治にこもりっきりである。「公にも私にも、御暇のよし申したまひて」(104)とある。朝廷勤務も公休をとり、家政事務も止めて大君看護

に集中している。尋常の沙汰ではない。「私」とは、後に見える「殿人、親しき家司」(105)による事務の決裁などをさすものと推察される。

【0160】 薫は加持祈祷に手を尽くしている。が、「ものの罪めきたる御病にもあらざりければ、何の験も見えず」(104)という状態であると本文にある。後に大君の死は怪物のせいであったという視点が導入されるのであるが、ここは、その発想と矛盾するように思われる。いかが考えるべきか。

【0161】 薫が大君の側についていることも、大君の死への願望を加速させる役目をはたしているのは皮肉である。こうまでなにもかも見られ知られてしまったら、「今はもてはなれむかたなし」(104)。たとえ本復しても出家するほかない、そうすることのみが「長き心をかたみに見果すべきわざなり」と、大君は考えている。大君の愛は、離れていること、距離を保っていることで果たされる朝顔型のものである。肉体的生活を卑下し霊的生活を重んずるプラトン主義の実現が彼女の生き方である。

【0162】 宇治のイメージ。「風いたう吹きて、雪の降るさまあわただし荒れまどふ」(105)。「かきくもり日かげも見えぬ奥山」(106)。都は、こんなことはないという発想は、実際とは相当違う。しかし、イメージのなかの宇治はこんなものである。

【0163】 大君の死を、豊明節会の日とした理由について。後考に俟ちたい。舞姫の舞う日だから、舞姫のように大君も天上に帰るということか。

【0164】 大君の最後の言葉。中君を私の変わりにと思っていたのに。「違へたまはざらましかば、うしろやすからまし」(108)。恨みを残した死に方である。この恨み、いささか甘えの匂いがする。しかし、恨みは恨み。彼女の往生も保証の限りではない。皮肉を言えば、おそらく彼女、往生出来なかった父のいるところへ行けるのではないか。

【0165】 大君の恨みに対する薫の返答。「いかにもいかにも、異ざまにこの世を思ひかかづらふかたのはべらざりつれば、御おもむけに従ひきこえずなりにし」(108)。もし、自分が何人女性を娶ってもよいというような世俗的な男なら、そうした。しかし、自分は純粹に貴方を思う気持ちに従ったまでだ。はたして本当か。彼は、匂宮の現状を見るなり、二人とも我が物として何の不都合もないと思っている。今、薫は、八宮との最後の対面の時と同じように、大君の期待する薫を演じているにすぎない。これは、そうとうに罪な行為だと思う。が、この場合、こうするほかなかるうけれども。

【0166】 薫の感想。「かくいみじうもの思ふべき身にやありけむ」(108)。「世の中をことさら厭ひ離れねとすすめたまふ仏などの、いとかくいみじきものは思はせたまふにやあらむ」(109)。これは、紫上を失った時の光源氏の感想と同じである。『源氏物語』における、薫の大君への愛の評価は、光源氏の紫上にたいす

る愛と同等のものであったという位置づけであろう。

【0167】大君の死。「ものの枯れゆくように消え果てたまひぬる」(109)。急激に瘦せていった彼女を象徴するような、やや淋しい死なせ方である。しかし、大君の死に顔は、あくまで美しい。「かくながら、虫の骸のやうにても見るわざならましかば」(110)と薫は思っている。空蟬の発想である。

【0168】大君は、結局、匂宮と中君との仲を誤解して死んだ。彼女は、彼女の想像力をふりしぼり、想像力によって自己を苛み死に至った。これは、薫の父、柏木の死に似ていないか。薫が大君に運命的にひかれていったのは、そういう血の匂いのせいではないかと推量されるが、いかが。

【0169】出家を決意していた薫だが、冷静になってみると、そうもいかない。女三宮のこと、この中君のこと。ほだしが多い。中君も自分のものにしておけばよかったという未練の男には、往生は難しだろう。彼は光源氏ではない。また、大君も、決して紫上ではないのである。

【0170】薫が宇治に來たのは十一月上旬。それから宇治に籠もり宇治を出るのは、年末である。「世人が、おろかならず思ひたまへること」(111)と思うのは当然である。帝をはじめとする甲冑が多く来る。こうして、八宮姫君、特に中君が認知されることとなる。世に認知せしめたのは、間違いなく薫である。そして、大君でもある。八宮から大君を経、そして中君が京都へ送り出されるという三段階の構図に注目したい。薫と大君は、その仲介者にすぎない。主役は中君なのである。

【0171】喪に服す美しい薫を見ての女房の所感。この薫との別れがせつない。この気分は、葵上が死んだ時の女房の感想に同じである。

【0172】薫から見た中君の印象。「けざやかなるかたに、いますこし子めき、気高くおはするものから、なつかしくにほひある心ざまぞ、劣りたまへりける」(113)。大君は「なつかしくにほひある心ざま」の人であったのである。

【0173】十二月。「師走の月夜」は「すさまじき」(113)ものと決まっていたらしい。

【0174】「簾卷上げて」月を見る薫。「向かひの寺の鐘の声」を「枕をそばたてて」聞く。こうなると、白氏文集の「香炉峰の雪」が誰にでも想起されよう。『枕草子』や『和漢朗詠集』で馴染みのものだ。ここでは、日中から夜へと時刻がずらされて使用されている。月を愛でることとしたのは、この秀句を含む「香炉峰下新卜山居。草堂初成。偶題東壁」の次に置かれた詩「山中間月」を意識したものか。だとすれば凝った構成だ。『枕草子』と差別化をはかる作者の意思かもしれない。さて、白氏文集では、この山居草堂の部分は、「心泰身寧是掃處」、「官途これより心に長く別る。世事今より口に言わず」の世界である。宇治の地が、薫のこの一言で、俗塵を離れた心やすまる山居草堂の世界と化す。そして、同じく「香炉峰下新置草堂。即事詠懷。題於石上」にある秀句「人間多險難」

という俗世・京都との対比が鮮やかに立ち上がる。今、薫は、白樂天がいたような山居草堂の世界にいて、これから「人間陰難多し」の世界に戻ってゆく。そして中君も、近いうちに薫と同じく「人間」に出てゆくことになるのだということ。こちらの方が、この時点ではむしろ重要ではないか。

【0175】「おくれじと空ゆく月をしたふかなつひにすむべきの世ならねば」(113)という薫の歌。これは、これからの薫のテーマであろう。大君は「月」に帰った天女。天女を慕い、ついに「この世」で「澄む」ことのできぬ薫。

【0176】「恋わびて死ぬる葉のゆかしさに雪の山にやあとを消なまし」(114)。もう一首薫は詠む。「死ぬる葉」は『竹取物語』の「不死の葉」を連想させ、大君天女帰天の発想のため押しととらえることができる。⇒【0175】。

【0177】雪山を見て、雪山童子の「半なる偈教えけむ鬼」(114)を思う薫。「諸行無常は生滅法生滅滅已寂滅為楽」。恋に死にたいと思う薫に対して、「心ぎたなき聖心なりける」という草子地がかぶさっている。大君の死、薫の悲しみなど、小さな煩悩の世界なのだという視点が確保されていることに注意しなければなるまい。薫は、我が身を飢えた鬼に差し出すことによって半なる偈を教えてもらった菩薩・雪山童子という釈迦の前身と比較されることによって、最大限に矮小化される。作者はこういう目で、今の薫を見ているのである。薫のことは、作者は完全に見切っている。にもかかわらず、これ以後薫を支持してやまぬ読者は、いうなれば、いまここにいる中君周辺の女房たちと同じなのだと作者は言いたくて、次に、そういう女房たちを点描している(114)ものと思われる。

【0178】雪を踏みわけやって来た匂宮(115～8)。身を捨てて一泊した匂宮に物越しの対面しかしない中君。彼女のせめての大君追悼行為と言うべきか。匂宮は、こういう薫体験は初めてであったかもしれない。「千々の社をひきかけて、行く先長きことを契りきこえ」る匂宮は、右近の恋人みたいである。疎みはてないであろう中君の未来の暗示としてとらえるべきものと思われる。

【0179】「何ごとともいとかう見るほどなき世を、罪深くなおほしないそ」(118)という匂宮。彼の人生哲学がにじんでいる。世紀末的だが、説得力がある。

【0180】「つれなきは苦しきものと、一節おほし知らせまほしくて、心とけずなりぬ」(119)というのだから、中君は、ほとんど匂宮を許しているのである。

【0181】薫の側においておくに危ないから、早々に中君を京都に引き取りたい、と匂宮は思っている。中君の宇治脱出の日は案外近そうである。

【0182】薫が大君の死を見取ったのが豊明節会の頃。今年末だから、およそ二カ月宇治に籠もっていたことになる。薫の長き不在は、宇治の重みを強調するに十分である。

【0183】薫と大君の一件を耳にして、明石中宮は初めて中君に対する認識を変えている。薫の信頼感のなせるわざである。そして匂宮に提案する。「二条の院の

西の対」に引き取ったかどうか。これは、すでに推測したように、中君が紫上の路線に乗る未来が開けた瞬間である。⇒【0111】。大君に幻惑されてはいけない。これは、中君こそが物語の本流なのだという、作者のメッセージであろう。

(注) 本文は日本古典集成『源氏物語』（新潮社刊）に依っている。括弧内数字はその所在箇所を示している。